

どこか気になるヨーロッパの都市②

プリストル（イギリス）

高橋 哲雄

めぐまれた田園の宿

イングランド西海岸のプリストルは中心部が十八世紀につくられ、工業化の十九世紀に追加された街区もかなりあるものの、大きな港町としてはまずは気持ちのいい都市であろう。だのに、いま思い出してみると、最初のとき（一九六八年）を除いて、街中に宿をとつたことがない。

ろくな宿がないのかといえばそうではない。そのときのホテルは市中心部の大聖堂の脇、カレッジグリーンに面する申し分のない立地の一流ホテルで、当時の私がふつうに泊まるようなところではなかった。たまたま懐具合のいい二人の友人と相部屋ということ、そうだった。ヴィクトリア時代のどっしりした大型ホテルで、設備は古びていず、部屋もバーも至極快適だった。すぐ近くのパーク・ストリートの

中華料理屋がまた、当時暮らしていたシェフィールドのどの店よりも上質の食べものを出すのに高くないのに気をよくした。港町としては人気のよさそうな街だなと思った。そういえば先に大学があった。

だのに、以後この街を訪れても市内に宿をとることはなかった。まわりに魅力的な町や村が多すぎるからである。イギリスの田園地方は泊まり歩くにもヨーロッパで最高の土地だが、プリストルを取り巻くあたりの西南イングランドは、なかでも指折りの一つといえよう。

まずわずか二十キロのところは格式と美しさをそなえた十八世紀小都市の華ともいえるバースがある。貴族やミドルクラスの社交界——ジェイン・オースティンの小説にいきいきと描かれた婚活の舞台——

も開かれたこの古い温泉町には、超高級ホテルから 長期滞在用の手頃な B & B (民宿) にいたる施設が目白押しである。すべてパース・ストーンと呼ばれる蜜色の、つまり淡黄色がかった灰色の地元の石材で作られていて、みことな統一感を醸し出している。

世界遺産の目玉建造物の一つであるロイヤル・クレッセントもホテルとして泊まることができる。街のいちばんの高み、緑の大斜面のうえに半月形に翼をのばした、貴族・富豪・名士のために建築家ジョン・ウツドが設計したこの巨大な「テラス型集合住宅」は一戸当り平均十五、六室をそなえ、舞踏会を催すこともできた。それが十一のスイート、三十四のルームのホテルに生まれ変わった。これはまあ高嶺の花としても、オースティンが気楽に滞在した小さな民宿もいまでも多くが健在である。そのどこを足場にしても、快い街歩きが楽しめることは請合いである。

北東方面に四、五十キロも車を走らせるとそこはもうコッツウォールドである。中世以来の毛織物産地で、ゆたかな農村の美しさを満喫させてくれることは、近年のわが国での人気からも推し量られる。ここがまた広大な地所に立つ貴族の館の改造ホテル(たとえばカースル・クーム)に始まって、村のバブの二階まで気持ちのよい宿に事欠かない。

そうかと思うと、南三十二キロの小村に忽然と、奇跡のように立つヨーロッパの大聖堂でももっともユニークな魅力をたたえたウエルズ大聖堂の西正面に向かい合って、ぱつんとむかしの飛脚宿がムライブツがあっ

たりする。大聖堂の正面の宿に泊まるというのは私の夢で、ストラスブル(フランス)では三階の部屋の窓に陣取って、夕日に輝く巨大な彫刻群の写生に励んだものだが、それはめったに叶えられないぜいたくであって、これまで私はリンカン大聖堂(イングランド北東部)をホテルの屋根裏部屋から隣家の屋根越しに、オルヴィエート大聖堂(イタリア)を正面広場の脇の宿の二階から斜めに二対面を果たしたことがあるだけだった。それがここではあっさり、最上の条件で叶えられるのである。

どこが気になる？

そういうことから、街中に特別な魅力がないのなら、駐車に苦労して中心部に宿を取る必要はない。私のばあい、カメラ、資料、とくに途中入手分を含めて荷物は重いし、訪問先はこまかく、日程はたいい詰んでいる、とあって、車を使わないわけには行かないのである。

しかしこれは、考えてみると、歴史都市プリストルのどこが「気になる」のか、つまり街の性格付けと微妙に関わるように思われる。この街は「旅する人の街」であり「通過者の街」ともいべき性格を持つているように、私には見える。どこかほかの世界への入口、あるいは出口なのである。港や駅につきものの、ある落ち着かなさを温えた街で、滞在や定住したいという気にさせる空気が希薄なのである。

私の住む神戸は同じく歴史のある大きな港町であるが、阪神大震災前には日本でいちばん住みたい都市に挙げられていた。そういう気分がここにはうすい。

それはここに縁のある人を念頭に浮かべるだけでもわかるような気がする。

時代順に挙げれば、ダニエル・デフォー、ジョン・ウェズレー、エドモンド・バーク、トマス・チャタトン、それにワーズワース、コーリリッジ、サウジーなどのロマン派詩人といったところが思い浮かぶ。ここに生まれたチャタトン、サウジーを含めて、彼らはすべてブリストルとは一過性の縁しか持たなかった。別世界への出口でしかなかった。彼らは「移動の世紀」である十八世紀を象徴する人びとであった。そしてブリストルは十八世紀都市であった。

どんな都市にも、あるいは国にも「ネヴァー・ベター」（またとな）いともいふべき高揚した時代、よかれあしかれ「ハイ・タイド」のときがあるものだが、ブリストルのそれは十八世紀であった。このときブリストルはイングランド第二の都市、「西の首都」と呼ばれた。

当然人の流れはしげくなる。というより、もともとこの町の発展は交通の要衝という地理的条件によるものであった。ウエルズとコーンウォールというイングランド西部に突き出た二つの半島部の両方への入口を扼す分岐点に当り、また大河セウアーンとエイヴォンの二つの航行可能河川の河口近くに当たるため、人、物、情報、文化のすべてがここを通過した。西南フランスとイベリア半島、アイルランドとア

メリカへの最大の玄関口でもあった。

悪名高い大西洋の三角貿易、つまりイギリスの衣料や金属製品、雑貨などをアフリカに持って行き、それと交換に買い入れた奴隷をアメリカ、西インド諸島に運び、そこから砂糖やタバコ、ラム酒を持ち帰るというサーキットは、のちにリヴァプールやグラスゴウで名を馳せたが、最初はブリストル商人の手で大々的に行なわれた。十七世紀末から一八〇七年の奴隷貿易廃止までに二千航海、五十万人の奴隷が運ばれた。盛時には年百航海、平均三万人。四人に一人の奴隷を航海中に死なせながら、莫大な富がここに集積される。

放浪人の寄港地——デフォーとウェズレー、そしてバーク

デフォーが『ロビンソン・クルーソー』（一七一九）のモデルとされる伝説の船乗りアレクサンダー・セルカークと会ったのはこの街の古い宿であるランドーガー・トラウ（ランドーゴ村のはしけ）でこのとであったという。この海賊の巢窟はまたステイーヴンソンの『宝島』の宿のモデルともいわれる。イギリスの二大海洋文学が接点を結んだのはいかにもブリストルにふさわしい。

しかし、デフォーはほかにこの地に痕跡らしいものをとどめなかった。『大ブリテン周遊記』（一七二四—二七）の著者である彼は国中いたるところに足を踏み入れたが、商人であり、ジャーナリストであり、ホイッグの政治パンフレティストとして広報・諜報活動にも従



The Llandoger Trow

事した彼はまさに神出鬼没、ほかのどの地でも不思議なほどその生活や仕事を偲ばせる場を残していない。探偵小説史家であり旅行ライターでもある才人イアン・ウーズビーは「小説では地理的正確さ、具象性が迫真性を高める役割を果たすことを十分心得ていた」デフォーが「何の追憶の手がかりも残していないのは皮肉なことだ」と述べて

いるが、スパイ、二重スパイをやつてのけた彼が後世の追及をかわすのは何でもないことではなかった。それにプリストルは姿をくらませるにはもつてこいの場所であろう。『宝島』のシルヴァー船長のように。
プリストルはまた産業革命以後のイギリス下層社会をとらえた最大の宗派であるメソジスト運動がのろしを上げた地で

あつた。創始者であるジョン・ウエスレーがはじめての野外大集会を開いたのがこの郊外であつた。ただ彼もまたこの地域とのつながりは必ずしも必然的なものではなかつた。道をつけたのは同信の友ジョージ・ホイットフィールドで、彼はアメリカのジョージアでの伝道事業の献金集めのため、はじめロンドンで、次いでプリストルで説教をしようとしたが、どの教会もあたらしい教えに門を閉ざした。なかには「そんなに異国の異教徒を回心させるのに興味があるのなら、なぜキングズウッドに行かないのか」とあざける者もいた。

キングズウッドとは近くの炭坑町で、住民は粗野で放縦をきわめ、教会もなく牧師もない宗教的荒野といわれていた。彼は一七三九年二月、冬のさなかに野外説教をおこない、二百人の聴衆を集めたが、次回は二千人、三回目は四千人、四回目は一万人という驚異的な数の人びとを惹きつけた。

これを引き継いだのがウエスレーである。国教会でも儀礼を重んじる高教会に属した彼は初め教会外での説教に反対だったが、やりはじめると徹底して、以来一七九一年の死までに馬にまたがって四万キロを踏破し、四万回の説教をおこない、九万人の信者を生んだ。しかし、メソジスト運動の主力は次第に産業革命の中心である北部・中部に移り、プリストルには最初の教会——「ニュー・ルーム」という名の——が記念碑的に残されただけとなる。この街は、場所のよさから余所者の最初の寄港地となる宿命が背負わされているかに見える。

同じことは哲学者であり政治思想家であり、現実政治にも深く関

わったパークについてもいえよう。アイルランド出身でダブリンのトリニティ・カレッジを出た彼は主としてロンドンで著述・言論・政治活動をおこなっていた。斬新で大胆な『崇高と美の起源にかんする哲学的一考察』によってイギリス経験主義の伝統に立つ若い文人としてさつそうと登場したパークは、同時に政治の世界にもつよい関心を抱いていてホイッグの代議士として初めはパッキンガムの小さなポケット選挙区から出たが、やがて一七七四年には当時イングランド第二の大都市であったブリストルから立とうとする。

リヴァプールにもマンチェスターにも議員選出権のなかったとき、ここはすでに二人区、トーリーとホイッグの一人ずつの無風選挙区であった。そこへ高い識見の持ち主として名声が高かったとはいえ、地元にもまったく縁がなく、政治手腕は未知数であった彼が割り込もうとしたのである。地元利益密着型であったライバル議員の強い反対のなか、彼がギリギリで候補に入り辛勝した、スリリングともいえるいきさつについては、中野好之『評伝 パーク』第十三章「ブリストル選挙区と経済改革」の興味津々たる叙述に委ねたい。このとき彼は有権者の意向と自己の判断が分かれたときには良心に従って自分の考えをとおすと公言した。四年後、アイルランドに貿易の自由を部分的に認めるか否かをめぐって、彼は公言どおりに地元商人の強硬な反対を押し切って賛成を唱え、それが長い眼で見れば地元の利益になると説いた。さらに、カトリック刑法の緩和にも賛成することで、反感をかきたてた。その結果、一七八〇年の選挙では公認を得ることができ

ず、彼の庇護者ロッキンガム侯が支配する他のポケット選挙区に移らざるをえなくなる。一世紀後のマンチェスターにおけるコブデンの悲劇を思わせる出来事である。

しかし、ブリストルは、マンチェスターが恩義のあるコブデンを裏切ったようなことをパークにしたわけではない。また、利益が背反することを初めから承知で、彼の志に惚れこんで彼を招聘し最後まで支持した開明的な商人もいた。この地は特権的貿易商人のギルド勢力がつよく、そのため近代化に乗りおくれたという理解があるが、そうとばかりはいえない。港の発展は早くも十八世紀前半にはリヴァプールに追い越され、本格的なドック建設も一世紀近く遅れて一八〇二年になつてやっと完成するのであったが、市民生活に関わる上水道建設は逆にリヴァプールやマンチェスターに一世紀以上先んじて一六九八年には完成している。つまり、この街には、遅れてスタートした北部の工業都市に比べると「シヴィック」な精神、公共的というか社会の共通部分への意識がより開かれた有力な社会層が存在したことをうかがわせる。奴隷貿易にかんしてもリヴァプールに比べると徹底を欠いた——コットンや銃器などの交換商品の開発が不十分で早くにそれを失った。北部の自由放任、弱肉強食の「賤民資本主義」に比べて少しばかり上品なのである。

少年詩人の死

この街から人材が出たのは街が昇り調子の時代であった。若い元氣な親からいい子が生まれるとは限らないが、都市と人のつながりについては、繁栄の絶頂か、わるくても鬨りが出始めたぐらいの時期が人材を輩出する傾向があるようだ。天才少年詩人トマス・チャタトン（一七五二—一七〇）が生まれたのはプリストルに最初の銀行ができて二年、王立劇場のできる十四年前、セヴァーン川にあたらしい大橋がかかる十六年前のことであった。

チャタトンが生まれる三カ月前に亡くなった父は詩と音楽の才能があり、墓堀男から教会の香部屋係へ、さらには教師にまでなった人物だが、いかがわしい性癖があったようで、古物、古文書の盗掘にはげんだりもした。この教会はセント・メアリ・レドクリッフといい、河



セント・メアリ・レドクリッフ教会

岸に近くゴシックの尖塔がきれいな線で立ち上がる中世以来の名教会で、エリザベス一世が「イングランドでもっとも美しい教会」と賞嘆したことで知られている。ついでながらこの国教会の大聖堂のほうには主な建築部分が十九世紀で、見るべきものに乏しい。カトリックのモダンな大聖堂も、リヴァプールのそれに比べると穏やかな快さはあるが、ややインパクトに劣る。

セント・メアリ・レドクリッフ教会には、チャタトンの叔父も墓堀男を勤めていたことから、少年は足しげく出入りし、古文書の山に埋もれて中世詩の世界に沈潜した。母は針仕事で生計を支え、少年は貧民のための慈善学校を出てから、十四歳で法律事務見習いとして働きながら、詩作に没頭し、地元の雑誌に寄稿したりしていたのだが、あるとき自作の詩を教会の書庫から発見した十五世紀の修道士トマス・ロウリーの作であるとして発表するという行動に出た。

十八世紀は偽作の世紀と言っておかしくない奇妙な文学的流行があった時代で、中世趣味と結びついて古いものに似せた創作を世に問うて識者を欺くといった例が続出した。チャタトンと同じころに出たマクファースンの「オシアン」騒ぎもその一つだが、こちらはもともなる古代詩の断片があったわけだから、まったくの偽作とはいえない。しかし、文壇の寵児ホレス・ウォルポールの『オトランド城奇談』は自作のゴシック小説を中世初期のイタリア語原典からの翻訳とうたって送り出した真正銘の偽作であった。これが未曾有の成功を収めてゴシック・ブームに火を付けた後、みずから仮面を脱ぐ。

チャタトンが偽作に手を染めたのはおそらくこの風潮に影響されたのであろう。やがてロンドンの大手出版社に『ロウリー詩編』の企画を持ち込むが、地方の無名少年では相手にされない。そこで彼は自邸に印刷設備も持ち、自身数年前に偽作で一山当てたばかりのウォールポールに目をつけ、まず別の偽作を送った後、好意的な反応に気を良くして、「ロウリー作」の詩と劇作品を送る。ウォールポールは一読、そのみごとに驚嘆したが、念のため友人たちに鑑定を依頼したところ、答えは十五世紀の作ではないと出た。ウォールポールは少年に結果を伝え「文学に専念できるだけの財産ができるまで法律の仕事をつづけるよう」と返事を書く。彼に似つかわしくない分別くささだが、そこまではいい。ところが、原稿返却を求める手紙に対してウォールポールがパリ旅行中のため返事できなかったことから、両者の関係が急速に悪化する。旅行中ということ知らぬチャタトンは梨のつぶてのウォールポールに不信感をつのらせる。大宰相の跡取りで富豪でもある彼に見くびられているのではないかと、プライドが傷つけられる。最後の手紙にはこうあった――

ウォールポール、きみのような卑しい心が
世にあるうとは夢にも思わなかった。

お蚕ぐるみで育てられて、友もなく父もなく、寄る辺ないままに
きみの愛護をもとめた少年を嘲笑い

見下し――きみがぼくを詐欺師と呼ぼうと――



チャタトンの死 ヘンリー・ウォリス画 © Tate, London 2009

どうだ、ご自身はそんなペテンをしなかったというのか？
『オトラント』を書いたきみが、なじっているのではない。嘲笑
には嘲笑で、誇りには誇りで応えているのだ。

（種村季弘『ハレスはまた来る 偽書作家列伝』より）

こうして自尊心と自己憐憫のかたまりのような十六歳の少年は、一旗揚げようとブリストルを去り、ロンドンの従姉の家にごりこむ。初めは作家や政治家と知り合い、ホイッグの機関紙に風刺詩を寄稿して好評を博し、前途は明るくみえた。しかし彼は調子に乗ってやりすぎた。ブリストルに残した知人たちを笑いものにする風刺

詩を発表したのである。それによって彼は医師や工場主、雑誌社主などからなる支持者からそっぽをむかれる。折悪しくその機関紙が穩健化路線への転換か廃刊を迫られるという事態が生じ、収入が途絶える。

従姉からは「事務所の仕事でも探したら」と言われてかつとした少年は家を飛び出し、スラム街の屋根裏部屋に越して、故郷のパトロンに手紙で助けを求めるが拒絶される。孤独と飢えにさいなまれたチャタトンは一七七〇年八月二四日、ネズミ捕り用を買ってあった砒素を仰いで死ぬ。ロンドンに出て四カ月、十七歳であった。

彼の死は八十年も後の一八五六年になって、ラファエル前派の画家ヘンリー・ウォリスによって衝撃的な迫真性で描かれ、ロイヤル・アカデミーに出展されて大きな話題となった。モデルは画家と親しかった詩人・作家のジョージ・メレディスで、当時二十八歳。なんとチャタトンが死んだその部屋で描かれた。画面の主人公は、たぶん実物のチャタトンに比べて品のよい美男子にすぎるであろう。ところがそのすこしあと、画家はメレディスの妻と駆け落ちした。チャタトンはその絵にさえ、「物語」がまつわりつく。いまこの絵はテイト・ブリテン（美術館）で見ることができる。

チャタトンの死と詩をめぐるスキャンダルはまたたくうちに広がった。その年王立美術院のパーティに出席したウォルポールは、詩人・作家のオリヴァー・ゴルドスミスが「プリストルで見つかった古い詩」を称賛するのを耳にし、少年の死も知って愕然とする。やがて彼

は天才少年詩人を死に追いやった元凶として指弾されることになる。これがコリン・ウィルソンのいう「英文学史上もつとも悲惨な物語」（コリン・ウィルソン『世界醜聞劇場』）なのであった。

ふるさとプリストル

チャタトン少年がプリストルを飛び出したのは文学的野心のせいだけではなかった。ふるさとを食い詰めてもいた。彼が偽造したのは詩編だけではなかった。けちなパトロンのために羊皮紙に書かれた先祖の系図を「発見」してやったりもした。同時に彼は札付きの不良少年、それも相当なワルであった。Spouting Club という名の反社会的・革命的不良少年団の頭目で、彼は一ダースの少女と関係して二人をはらませたという。性病にもかかり、アヘンや砒素、ピストルの取引にも携わっていた。ここにいる間に書いた風刺詩がもとで、腕をへし折ってやるといふ脅迫を受け、怯えてもいた。フランソワ・ヴィヨンさながらであった。悪口を浴びせかけられたウォルポールが「ひとりの人間が成熟期に達する前に、まぎれもない悪党、悪漢たりうることの見本」と言いたくなるのもわかる。けれど、彼（やプリストルのパトロンたち）に大人の襟度があり不幸な行き違いがなかったら、あるいはヴェルレーヌとランボー、コクトーとラディゲ、ジュネの出会いに似た結びつきが生まれていたらかもしれない。

チャタトンの死後四年たった一七七四年はプリストルにとってパー

クが庶民院に打って出た年であったが、同時にそれはロマン派の詩人・作家ロバート・サウジーがこの地に生を享けた年でもあった。サウジーは――

さらば、ブリストルのうす汚い煉瓦の山よ！
マモンの愛人、トリックの崇拜者どもよ！

とうたつたチャタトンと違つて故郷とつながりがつよかつた。オクスフォードを中退してブリストルに帰り、一七九四年には詩人コールリッジを迎えて一年間の共同生活を送りながら、アメリカに移住しての「汎平等団」計画を練る。その間に親しくなつた同志のフリッカー姉妹とあいついで結婚した。場所はあのセント・メアリ・レドクリッフ教会であつた。

やがて一七九七年にワーズワース兄妹が合流して、ブリストルとその後背地方は湖水地方に先立つロマン派揺籃の地となる。この年から翌年にかけての、文学史でいう「驚異の年」は画期的なワーズワースとコールリッジの共著『抒情歌謡集』に結実するが、これはブリストルのコトル書店から出版されたものであつた。社主ジョーゼフ・コトルは文学愛好家で彼らの力づよいパトロン役を務めた。すでにコールリッジの『雑詠集』やサウジーの『ジャンヌ・ダルク』を出版するこ

といわれる。

空想への通路

さて私は、おかしな夢想にふけることがある。

コトルが二十数年前から出版事業と文学パトロンをやつていてチャタトンを庇護下に置いていたら、そして『ロウリー詩編』はもちろ

ん、その続編が続々と現れるようなことが起こつていたら、英文学史は相当書き直されることになつたのではないかと。そこではブリストルは文学運動でも「西の首都」なのであつた。
実際そうなつたかは大いに疑問で、円熟したチャタトンを想像するのはむづかしいし、そんなやわな不良であつたとは思えない。しかし、五十代になつた彼がコトルの店で二十歳も年下の詩人たちを掴まえて、「ワーズワースくん、きみたちの今度の詩集はわるくないね。ぼくたちの時代は子供が大人に化けようともがいたものだが、子供の心をそのままつたいあげようとしていないか。いや、あたらしいものを感じたよ」などとぶつているところを空想するのは嬉しい。
チャタトンはまっしぐらに冥界に突進し、ワーズワースらはやがて湖水地方やその他の土地に去るのだが、ブリストルはそうした現実とは別の想像の世界への通路でもある。

写真 ST MARY REDCLIFFE © Robert Brewer

Landogger Trow pub © swamp dragon

